

吉川幸次郎著「漢文の話」ちくま学芸文庫、筑摩書房 2007年10月10日刊を読む

漢文の話

1. われわれの祖先は、漢文を愛した。ずっといつの時代でもそうであったわけではない。もっとも高潮したのは、江戸時代であって、伊藤仁斎^{じんさい}、荻生徂徠^{おぎゆうそらい}など、第一流の大家を筆頭にして、ひろい範囲の武士また町人の、教養であった。
2. 高潮は、明治の漱石、鷗外、露伴、藤村、花袋、啄木に及んでおり、大正と昭和では、荷風、芥川龍之介に、顕著である。
3. 漱石について印象的なのは、その「文学論」の序に、次のようにいうことである。

...余は小時好んで漢籍を学びたり。之を学ぶこと短かきにも^{かかは}関らず、文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり。ひそかに思ふに英文学も亦かくの如きものなるべし、斯^{かく}の如きものならば生涯を挙げて之を学ぶも、あながちに悔ゆることなかるべしと。余が单身流行せざる英文学科に入りたるは、全く此幼稚にして単純なる理由に支配せられたるなり。

4. 文中に見える「左国史漢」とは、「左伝」、「国語」、「史記」、「漢書」であって、いずれも漢文の歴史書の文章の、古典である。
5. つぎに漱石は、英文学が、漢文と必ずしも内容を同じくしないことを発見して、それに苦しんだことを述べたうえ、まずいう、

...^{ひるがへ}翻つて思ふに余は漢籍に於て^{さほど}左程根底ある学力あるにあらず、然も余は充分之を味ひ得るものと自信す。余が英語に於ける知識は無論深しと云ふ可からざるも、漢籍に於けるそれに劣れりとは思はず。学力は同程度として好悪のかく迄に^お岐かるゝは両者の性質のそれ程に異なるが為めならずんばあらず、換言すれば漢学に^{いわゆる}所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の^{もと}下に一括し得べからざる異種類のものたらざる可からず。

6. 漢文と英文学と、両者の性質が、漱石のいうほど異なるかどうかは、別の問題として、その英語の知識が、漢籍のそれに劣れりとは思わず、というのは、漢籍における学力が、「左程根底あるにあらず」という謙遜にもかかわらず、実は「根底ある」、しっかりしたものであったことを、暗に語っている。

[コメント]

日本人の教養は漢文に裏付けられていることは明白。なのに最近はずっぱり漢文の重要性が伝わってこない。これは日本文明の危機とさえ言える。今こそ漢文を学びたい。本書はその基本的な啓蒙書の一つ。大いに学びたい。

- 2011年4月24日 林 明夫記 -